

イースターに為される「Me Too」宣言

長かったレントも終わり、今日は待ちに待ったイースターです。ここしばらくはずっとイエス様の十字架の場面を取り上げてきましたが、今日はそのイエス様が復活されたお話を取り上げます。イエス様は十字架の上で悲慘な死に方を為さいましたが、今からおよそ 2000 年前の今日、復活されたのです。ヨハネによる福音書 20:1～10 には、日曜日の朝早く、マグダラのマリアがイエス様のお墓に行くとお墓から石が取り除けてあった、そしてそのマリアの報告を受けた二人のお弟子さんがイエス様のお墓を見に行くと、イエス様のご遺体がなく、お墓が空っぽだったというお話が記されています。さらに 20:11～18 には、復活したイエス様がマグダラのマリアに現れるお話が記されています。そして、今日のお話です。

イエス様が復活された日曜日の夕方になりました。この日、イエス様はマグダラのマリアには復活したお姿を現されましたが、まだ他のお弟子さんたちにはそのお姿を現してはいません。お弟子さんたちはものすごく大きな不安の中にありました。実はイエス様が逮捕された時、お弟子さんたちは自分たちも逮捕されるのを恐れて、皆イエス様を見捨てて逃げてしまっていたのです。イエス様が十字架につけられた時も、それを見守ったのはイエス様に従ってきた女性たちで、男のお弟子さんたちはほとんど逃げてしまっていました。イエス様が復活された日もお弟子さんたちは、「自分も逮捕されてイエス様みたいに殺されたらどうしよう」とユダヤ人たちを恐れて、家の戸に鍵をかけて閉じこもっていました。「わたしは主を見ました」というマグダラのマリアのお話も、この時のお弟子さんたちにとっては「本当にそんなことがあるのかなあ。だとしたらイエス様、自分を見捨てた私たちを恨んでるんじゃないか」と、不安を掻き立てる材料でしかありませんでした。

するとそこへイエス様がやって来たのです。家には鍵がかかっていたにもかかわらず、イエス様は来て真ん中に立たれました。そして、「あなたがたに平和があるように」と言われました。お弟子さんたちが覚悟していた、「よくも私を見捨てたな。お前たち

を呪ってやる」というような言葉ではなく、本当に赦しの言葉でした。お弟子さんたちはここで、罪や過ちを犯した人をもお赦しになるイエス様の深い愛に触れたのです。けれども、私は本当に大事なものは、その後にイエス様が取られた行動だと思います。イエス様は手とわき腹とをお弟子さんたちにお見せになりました。

それは、「私は幽霊じゃないよ」ということだけを示したものではありません。イエス様は十字架でつけられた傷をお弟子さんたちにお見せになることを通して、御自分の赦しの中、お弟子さんたちに自らの罪と弱さに向き合うよう導かれたのです。

イエス様の傷を見て、きっとお弟子さんたちは思い出したことでしょう。つい三日前まで自分たちがイエス様に従おうとしてきたこと、それがどんな生き方だったかを。そのイエス様が十字架の上で傷つけられた。そのイエス様を、その生き方を自分たちが見捨てて放り出してしまったこと、そのことを赦しの中で突き付けられたのです。そして改めて「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」と、御自分の生き方にもう一度従い直し、御自分が与える使命に遣わされていくようにお弟子さんたちを招かれたのです。

イエス様の生き方、それは社会の片隅に追いやられ、苦しむ人々と共におられる生き方でした。病気に苦しむ人々、障がいを抱えた人々、罪人とレッテルを貼られて外へ放り出されてしまった人々、このように呻き苦しむ人々を決して一人にせず、寄り添っていかれた生き方でした。

イエス様のお弟子さんたちもこの生き方に従っていこうとしましたが、最後まで従いきれなかったのです。「私はイエスとは関係がない」と言って逃げ、十字架の上でイエス様を一人ぼっちにしてしまいました。誰も「私もイエス様の仲間です」とは言わなかったのです。そして、お弟子さんたちはイエス様と出会う前の生き方に戻って行ってしまいました。イエス様を一人ぼっちにしたように、呻いて苦しむ人々を一人ぼっちにする生き方です。イースターというのは、イエス様が鍵をかけられた戸、それ

はお弟子さんたちの心を象徴しているかのようですが、その戸を打ち破って、お弟子さんたちを再びそこから御自分の生き方へと連れ戻しにやって来てくださった日に他なりません。

この日に、私たちも鍵をかけた心の戸を開いてイエス様をお迎えするように、そして自らの生き方を悔い改めてイエス様の生き方に従い、この世へと遣わされていくように招かれているのです。

ここで皆さんにお聞きしますが、皆さんは「Me Too」宣言というのをご存じでしょうか。「Me Too」という宣言は、若い黒人女性たちを支える団体が2006年頃から、家庭での性虐待を受ける女性たちの支援を呼びかけるために使われ始めた言葉に他なりません。特に女性たちへの暴力に抵抗し、暴力をふるう人のその罪を告発し、被害者を独りにしないという意見表明の言葉として使われ続けてきました。今でも誰かがひどいことをされる事件があると、「被害者を独りにしないよ。私も一緒に闘うよ。連帯するよ」という意味で、この「Me Too」という言葉がSNSなどで使われて、その人と一緒に闘っていく運動が為されます。

イエス様が逮捕され、十字架につけられていった時、誰も「Me Too」と言ってくれる人はありませんでした。にもかかわらず、イエス様はお弟子さんたちを赦して、「あなたがたに平和があるように」と言ってくださいなのです。しかし、ここで考えたいことですが、平和とは誰か一人だけが犠牲となって与えられる類のものでは決してありません。イエス様はその御傷をお示しになってお弟子さんたち、そして私たち一人ひとりに問いかけます。「この傷を見てごらん。この傷は決して私だけのものではないんだよ。今のこの世界には、同じように理不尽に傷つけられている人々がたくさんいるんだよ。私を独りにしたように、その人たちもあなたたちは独りにするのかな」と。

イエス様の時代からおよそ2000年がたった今も、この世界には呻き苦しむ人々が大量にいます。その人々と共にイエス様はおられ、懸命に寄り添っておられます。その

イエス様をまた一人ぼっちにするようなことがあっては決してなりません。平和はこの世で働くイエス様に、また呻き苦しむ人々に「Me Too」と宣言していくところから始まっていきます。誰かが独りにされ、いじめられ、それで大勢助かることが平和では決してありません。それが当たり前になってしまっている今のこの世界、そしてそんな状況に慣れてしまっている今の私たちですが、このイースター、教会としてイエス様と、またこの世の呻き苦しむ人々と連帯する「Me Too」宣言を改めてはっきりと為していきましょう。罪と弱さに溢れた私たちではありますが、イエス様に従い直す新しい生き方でこの世界に平和を打ち建てていきたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——